

をかせぐ為の労働、③収入のより増大を計る為の労働—それに、②家庭外での娯樂の増加や（保育に欠けるか否かは経済的理由を問わない）③遊び場の問題（溺死と自動車事故が幼児死亡率の六五%の多きに達している）等があげられる。

日本は子供の幸せの為にすでに立派な児童憲章を持ち又子供を不幸せから守る為の児童福祉法を施行してすでに十五年になる。しかし我々が今日、我が国の児童の生活実態を通覧する時、児童に対して大きな希望を持ちつつも、反面何かしら深刻な憂慮を感じざるを得ない。というのは、我々はいたずらに新規を追うの愚をくり返している感がある。第二次大戦後、児童保育に対する公的責任を自覚し、これに基いて各種の方策を講じることにより努力している事実は明確に認めることが出来るが、児童の健全育成については、これ迄のところ児童そのものだけが対象として考えられ、背後の家庭や地域社会を見詰める努力がおそそかにされていた様に思う。我国児童福祉法の規定に見られる^{（一）}国及び地方公共団体は、児童の保護者と共に、児童を心身ともに健やかに育成する責任

を負う^{（二）}の精神に則つて、児童保育の本質的理解を各自のものとするよう努力すべきである。「人つくり国つくりは結局「児童つくり」だ」との言葉どおり、今日の保育は今日の子供を作るのではなく、二十年後、三十年後の日本国民を作り上げるのである。児童保育が家庭保育の重要性を自覚するとともに、その限界性を社会的に補い、家庭と社会との協力体制がとられることこそ最も望ましい児童保育の姿ではなからうか。

非行少年の実態と その教育的補導

安 田 義 典

最近國際的にも非行少年の増加が見立ち日本に於てもその問題の重要性を内閣も認め、社会もその問題対象を各方面より考えられている。特に内閣もこの問題を重要視して、麻薬対策と並行して、青少年協議会を施直、内閣総理大臣の諮問機関とし、統理府と都道府県及び市町

村にも設置し、その対策を立てている。しかし非行少年の数は毎年増加の一路をたどり、その非行内容も昭和三十年を境として、以前は経済の不安定の為、それにする非行内容であつたが、最近の傾向として「集・暴・性・累・速」の五字で表現出来る。集は非行の集団化、暴は非行の暴力化、性は性的犯罪の増加、累は累犯即ち再非行であり、速は非行のテンポが速くなつた事であり、道路交通法違反に関するものが最近では特に目立つのである。これら非行の内容は、その時代を反映するものであり、少年達は大人社会の鏡であると言える。

これら非行の根本的原因としては、

一、敗戦によるこれまでの価値体系の崩壊及び生活規範ものの考え方への不安定

一、最近の少年の身体的成長の加速度現象に対する精神的発達が伴わない。

一、家庭、学校、職場及び社会に於ける、少年の欲求不満因子の増加。

一、マス・コミの商業主義による暴力、性に関する宣伝による刺戟の増大

一、機械文明の発達に伴う、余暇時間の増大以上五ツを上げる。

非行問題の観点に関して、安部治夫氏のように非行少年自体に問題点を置く場合と、出射義夫氏のような大人の社会、家庭即ち環境に問題点を置く場合があり、即ち刑事処分と保護処分に分かれ、少年法に於ては保護処分と刑事処分が含まれているばかりでなく、保護処分そのものがすでに少年の保護育成の機能と社会公共の福祉を守る機能を兼ねており、この二つの機能が結合して少年法は成立しており、この問題の視点をこのようにして考えなければならぬ。

次に非行問題を考察する場合、彼達を取り巻く環境と心理状態を充分理解し、特に累犯の多い事に焦点を合わせ、累犯者とI・Qの関係を奈良少年刑務所及び同監別所を対象として調べ非行内容及び環境について考え、その結果、累犯者を防止すれば単に代数的な減少だけでなく幾何学的な減少結果を得る事が出来た。そして境界線児に関する累犯状態と現行の教育制度のあり方について

述べ、それに関する行政面のセツシヨナリズム的な考え方を問題点として考え、最後に實際面の補導方法を「ロウエル・カールの補導の三原則」に基づき、中学生にどのように応用出来るかと、その問題点に関して述べ、最終目的である予測、予防の面に関して、調査結果より私的結論を出す。

非行少年問題を考察する場合、又対策を立てる場合、国家及び社会が一団となつて、社会の浄化、経済の安定身分的差別の徹廃、及び彼達の心理状態の理解、特に内面的な理解が必要であり、このためにはカウンセリングが必要であると同時に彼達の「ものの考え」の確立、即ち信念をもつように我々は今後彼達を動機づけねばならない。このためにも、ケース・ワーク、グループ・ワーク、community-organization、counselor、board、work、community-organizationを単に理論的に学ぶのではなく、それらを実践に生かして初めて役立ち、又それが理論となつてあらわれるのである。即ち、理論と実践のサンドウィッチ的な積み重ねによつて行なわねばならない。これは社会福祉事業に関する、あらゆる面に適合することであり、このように行うのが社会事業の

本来の姿であり、又我々の任務でもあり、義務でもある。

